

---

**玻璃真人新記(はりまびとしんき) 真言(まこと)の... 第二部 深化(しんか)**

新美 宇受女

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

はりまびと<sup>き</sup> 真言の… 第二部 深化<sup>しんか</sup>  
玻璃真人新記

### 【Nコード】

N4053BA

### 【作者名】

新美 宇受女

### 【あらすじ】

投稿済み連載小説『玻璃真人新記 真言の… 第一部 覚醒』の続編。主人公真言の高校三年生の生活を軸に、玻璃真人として目覚めた能力を日々の中でフィードバックしながら成長していく過程を綴ります。

## 第一章 里帰り - 1

連休最後のその日は五月晴れだった。村のそここで、子供たちの成長を願う鯉のぼりが、春風を受けて青い空の海を勇壮に泳いでいた。

「いいら〜か〜の波と雲の波〜」

庭先に舞香の歌声が響いていた。真言と松子の姿もあった。

「ねえー。うちも鯉のぼりあつたらいいのにな」

舞香が言った。

「何言ってるんだよ。鯉のぼりは男の子のお祝いだろ。それに舞香にはひな人形があるじゃないか」

真言があきれた様に言った。

「えー。今日は子どもの日だもん。男の子と女の子のお祝いの日でしょ。それにうちにはマコトがいるじゃないの。ねえ、おマツさん」

「オイオイ、オレは子どもじゃないってば」

「そうですねえ。マコトはんではちよつとばかり大きすぎますかねえ。ところでマコトはん、いらかの波ってどういう意味か分かりますか」

笑いながら二人のやりとりを見ていた松子が真言にたずねた。

「え、いらか：イ・ラ・カか。何だろう。歌詞の意味なんて考えたことなかったなあ」

首をかしげる真言に舞香が言った。

「いらかは屋根の瓦のことだよ。そんなことも知らないの、マコト」

「へえー、そうなんだ。マイカそんな言葉よく知ってるね」

真言は素直に感心した。

「だって音楽の教科書で習ったもの」

「そうだったけなあ」

真言は再び首をかしげていた。

「青い空に鯉のぼりが映えて、今日は本当にその歌がぴったりの端

午のお節句ですなえ」

庭の木々の向こうに泳ぐ、隣家の鯉のぼりを見ながら松子が言った。  
「それではマコトはん。ここを掘ってくださいな」

松子が花壇を指差した。

三人は皆、長ぐつに軍手といういでたちだった。連休最後の日を利用して、夏に向けての庭造りの最中だった。

真言がスコップで土をひと掘りした時、二階の書斎の窓から長田の  
声が出た。

「マコト。話があるから、上がってきてくれないか」

真言が部屋に入ると、長田は窓際の籐椅子をすすめ、自分もその向  
かいに腰を下ろした。

「連休も今日で終わりだな」

長田が言った。

「世間では明日からいつもの日常が始まるんだね」

「そうだな」

真言の言葉に長田は相づちを打った。そして一呼吸おくと、真言の  
顔を見つめて言った。

「実はついさつき本部から連絡があつたのだが、朝霧涼子と教祖を  
はじめとする主だった幹部が逮捕され、教団は解体されたそうだ」  
一呼吸おき、微笑みながら長田は言葉を続けた。

「もう教団から命を狙われる心配はない。おめでとつ。マコト、お  
前はまだ自由の身だ」

「自由……」

小さな声で真言がつぶやいた。

「何だ。嬉しくないのか？」

おかしそうに長田が言った。

「え、いえ。嬉しいです。何だか突然だったので……」

「そうだな。しかし本当に良かったな。これでもうお父さんたちの  
所に帰れるぞ。すぐにヤエガキの皆さんに知らせてあげなさい」

真言は黙ってうなずいてからたずねた。

「あの…。ケンザキはどうなったのかな」

「ああ、彼は直接教団の事件には係わっていなかったから、特に罪を問われることはないだろう。ただ、父親の刀を持ち出した件に関しては、何らかの処罰しよばつはまぬがれないかもしれない。しかし、それも書類上の処分ですむのではないかな」

「あー、良かった」

真言がほっとした表情で言った。

それを見た長田が笑った。

「オイオイ。自分のことより、ケンザキのことの方が嬉しそうじゃないか」

そのとき、庭の方から舞香の声が出た。

「マコトー、オサー。庭造りが進まないよ」

舞香の要請を受けて、真言は書斎を後にした。

夕飯の席で長田が真言にたずねた。

「もう、お父さんには連絡をしたのか？」

「えっ、まだです」

箸はしを止めて真言が答えた。

「どうした？早くしなきゃだめじゃないか」

長田があきれて言った。

「ねー、何の話？」

舞香が興味深そうに聞いた。

「実は、教団が解体されたという連絡が入ってね」

長田が言った。

「え！じゃあ、マコトは自由になったんだ！オメデトウ。マコトー！」

「まあ、それは…。良かったですねえ。マコトはん」

舞香と松子が笑みを浮かべて口々に言った。

「それじゃあ、もちろんヨウコさんもだよね！」

舞香は葉子の顔を見た。

「ええ、そうなの。ありがとう。マイカちゃん」

葉子も微笑んでうなずいた。

「ええ、まあ、本当に良かったですね。お二人とも…」

松子は目頭を押さえた。それから小さく手を叩くと、

「あらあら、乾杯の用意もしてありませんでしたねえ」

と、あわてて席を立った。

「あ、お手伝いします」

葉子も松子の後に続き台所に向かった。

「マコトったら、どうしてすぐに教えてくれなかったのー」

すねたそぶりで舞香が言った。

「え、いや…」

真言が返事に困っていると、舞香が続けた。

「もう隠れていなくていいってことは、マコト、ヤエガキの家に帰っちゃおうの？」

「それは…」

再び真言は言葉をにこした。

「マユミちゃんの所へ…」

舞香は真言の目のぞきこんだ。

そこへ松子が乾杯の飲み物を運んできて、残念そうに言った。

「オサはんが教えてくたはってたら、色々お祝いのごちそうも用意できましたのにねえ」

「いや、すみませんね。まあ、お祝いはりヨウイチたちも呼んで、改めてやりましょう」

そう言うと長田はワインの入ったグラスを手に取り、乾杯の合図をした。真言たちもジュースの入ったグラスをかかげた。乾杯の後で長田が言った。

「マコト。食事が終わったらすぐに電話を入れなさい。それから明日にでも一度家に帰りなさい」

真言は黙ってうなずいた。

「ご家族もきつとお喜びでしょうね」  
葉子が言った。

「そうですね。早く顔を見せに行っておあげなさいな」  
そう言いながら松子は何度もうなずいた。

部屋に戻ると、真言は八重垣やえがきの家に電話をかけた。長田と共にシユラ教団との対決に向かう前日、真言は父の真二しんじと電話で話した。あの時は、もう二度と再び家族に会えないかもしれないという思いがあった。剣崎けんざきとの対峙たいじから無事に帰ることができたあの夜も、ただ帰ったという旨だけを伝えた。そして今度の電話は、真言も家族も心から待ち望んでいたこと、シユラ教団の追跡ついせきから解放されたという知らせだった。

数回のコールの後、受話器を取る音がした。

「はい。ヤエガキです」

真由美まゆみだった。

「あ、オレだけど」

一瞬の沈黙ちんもくの後、真由美が言った。

「マコ兄？何かあったの？」

「いや、何もないよ。父さんいる？」

真言は笑いながら答えた。

「ああ、マコトか。何かあったのか？」

電話口で真二が同じことをたずねたので、真言は思わず吹き出してしまった。

「何もないってば。えっと、実はさ、教団が解散したんだって。それでオレはもう逃げ隠れしなくてもいいことになったんだ」

「え、本当か！」

真二が嬉しそうに叫んだ。

「そうなんだ。晴れて自由の身ってやつ」

真言は少しおどけて言った。真二からはしばらく言葉が返ってこな

かった。

「…良かったな。マコト…。良かった」

少し鼻声になった父の声に真言の胸も熱くなった。

「それで、いつ帰れるんだ」

真二がたずねた。

「明日、一度帰るよ」

「おー、そうか。そうか。夕飯には間に合うか？きつとおばあちゃんに張り切ってごちそうを作ってくれるぞ」

真二が弾んだ声で言った。

「あ、うん。もちろん早く帰るよ。じゃあ明日。おやすみ」

そう言つと真言は受話器を置き、小さなため息をついた。

どうしたんだろう。やっと自由になれたのに…。

夢に見たその日がやっと現実のものになったのに、諸手を挙げて喜べない自分がいた。

翌日一緒に朝食をとっていた舞香が、真言の顔をのぞきこんでたずねた。

「ねえ、マコト…。また戻ってくる？」

「え、帰ってくるさ」

真言の答えに舞香はほっとした表情を見せた。

「そつだよね。荷物もあるし、今日からもつずっといなくなるんじゃないよね」

「当たり前じゃない…」

真言が言い終わらない間に、舞香があわてて立ち上がった。

「わっ！もうこんな時間。じゃあマコト気をつけてね。マユミちゃんによるしく。行ってきまーす」

そう言つと、真言を残して部屋を出て行った。

相変わらずあわただしいなあ…。

一人残った真言は舞香の言葉を思い出していた。

今日からもういなくなるんじゃない…。名古屋からすぐに戻ってくるつもりだが、それからは？オレがここに置いてもらっているのは、シユラ教団から身を隠すためだった。けれど今はもうその教団も無いんだ…。

松子と葉子に見送られて、昼過ぎに真言は長田の家を出た。和菓子  
の好きな真由美のために、松子は朝から和菓子屋に出向き用意した  
手土産てみやげを持たせてくれた。長田は早朝から留守だったので、真言は  
自転車で駅に向かった。

道の両脇には、連休中に苗が植えられた水田が広がっていた。鏡の  
ような水面に青い空と白い雲、そして山影が映っている。

乗客のまばらな列車に揺ゆられて、真言は名古屋に向かった。名古屋  
を訪れるのは、二月に賢一けんいちに会いに行つた時以来だった。

団地の入り口でバスを降り、家に続くゆるやかな坂道を登った。街  
は以前と変わらないように思えた。八ヶ月が長かつたような、短か  
つたような不思議な感じだった。真言は家の門の前に着くと、一呼  
吸おいてから玄関げんかんチャイムに指をやつた。チャイムの音と共に初江はつえ  
が飛び出してきた。

「マコちゃん…。おかえり…。マコちゃん」

「ただいま。ばあちゃん…。えっと、そうだ。これおマツさんから  
真言が差し出した紙袋を受け取り、初江は笑顔で言った。

「おやまあ、おマツさん、気を遣つかってもらつて。さあ、マコちゃん。  
入つて、入つて」

玄関に入ると真言はまず一番に母の仏壇ぶつだんに向かった。まだ新しい仏

壇の前に、懐かしい母の遺影が飾られていた。

「ただいま。母さん……」

真言は手を合わせてつぶやいた。思えば八重垣の家にいた頃、まともにも仏壇を拝んだことはなかった。その頃の真言は母の死を受け入れられず、自らの業に立ち向かう勇氣もなかった。

「ごめん……。母さん。ありがとう。この家に帰ってこられたよ。きつと母さんのおかげだね」

今は素直な気持ちで母に向き合うことができた。真言の目から一筋の涙が流れた。自分を責めるのでも、運命を恨むのでもなく、ただ母を失った悲しみと寂しさを認めることができたのだった。

うなだれる真言を残し初江はそっと席をはずした。真言は涙の流れるままにまかせていた。その一粒ひと粒が静かに心に染み込んでいくようだった。真言はようやく母を空に帰すことができたと感じていた。

仏間を出た真言は居間でお茶を飲みながら、しばらく初江と近況を語り合った。

「そう。マイカちゃんが中学生にねえ。今度はうちにも遊びにきてもらおうね」

ひとしきり話が終わると初江が言った。

「マコちゃんの部屋はそのままにしてあるんだよ。ひと休みしておいで」

初江の言葉通り、二階の自室はあの夜のままだった。読みかけだった雑誌も、CDプレーヤーの中のディスクも時が止まっていたかのようにそこにあった。

開け放たれた窓を風が通り抜けていく。真言はベッドの上に仰向けに寝転がり、部屋を見回した。棚にはテレビやゲーム機器が並んでいる。

そういえば、村に行ってからゲームなんてしたことなかったよな。  
…ってというかテレビもなかったんだから。

随分<sup>ずいぶん</sup>シンプルな生活をしていたものだと思言は思った。

ひと昔、いやふた昔以上前の暮らしかな。そういえば、リョウイチ  
が禅僧<sup>ぜんそう</sup>の部屋みたいだって言ってたよな。

玄関の開く音と同時に二つの声がした。

「マコトー！」

「マコ兄！」

階段を駆け上ってきたのは、真由美と賢一だった。

「おかえり〜、マコ兄！」

「よっ！マコト。無事帰還<sup>きかん</sup>だな！」

「ケンイチ！お前何で知ってるんだ？」

真言が驚いて聞いた。

「さっき駅で会ったのよね」

真由美が説明した。

「とにかく、とにかく。オメデトーだ〜。マコトー！」

そう言い終わらないうちに、賢一は真言に抱きついた。

「あ、いてて、あ、ありがとう」

「って言うか。水臭<sup>みずくさ</sup>いなあ。お前、すぐに連絡くれよ！」

賢一が口をとがらせて言った。

「ごめん。ごめん。帰ってから連絡しようと思ってたんだよ」

真言が頭をかきながら謝<sup>あやま</sup>った。

「おやまあ、もうここで盛り上がったんだね。さあさあ、飲み物  
でも用意するから、下でゆっくり話しなさいな」

初江にうながされて、三人は階下に場所を移した。

ひとしきりお互いの近況を語り合った後で賢一がたずねた。

「で、いつから学校に来るんだ」

「え、まだ決まってるないんだ」

「何だよ。明日から来いよ。そうそう。今ならまだコンクールの練習始めたばかりだからさ。今年こそリベンジだぞ」

賢一は畳み掛けるように続けた。

「コンクールって言われても…」

真言が言葉につまづいてると

「あ、スマン。軽音のことはお前の気持ち次第でいいさ。じゃ、オレそろそろ帰るわ」

初江が夕飯に誘ったが、今日は家族水入らずだと断って賢一は帰っていった。

「フウ…。相変わらずよく喋るヤツだ」

真言は肩をすぼめた。

「嬉しいんだよ。ケンイチくんも」

真由美が笑いながら言った。

賢一と入れ替わるように父の真二が帰宅した。

「お帰り。父さん」

「お、帰ってたか。マコト」

真二は真言の顔を見ると、平静を装ってそう言ったが口元はほころんでいた。

巻き寿司にいなり。肉じゃがに茶碗蒸し。ダイニングのテーブルは真言の好物で埋められていた。

「すっごいねー。おばあちゃん」

真由美が目丸くした。

「本当だよ。お盆とお正月とついでに誕生日も一度に来たみたいだ。真言も感心して言った。

「だって、マコちゃんに八ヶ月分食べてもらわないとねえ」

初江の言葉に皆が笑った。

真言の帰宅を祝う乾杯を合図に、久しぶりに八重垣の一家四人揃って

ての食事が始まった。真由美と初江は、長田の家で別れてからの五ヶ月間の話を聞きたがった。真二は夕刊を手にウイスキーのグラスを傾けながら、時折三人の会話に加わった。

「ネエ、マコ兄。またオサダさんちに戻るの？」  
真由美がたずねた。

「え、うん」

「そりゃあ、マユミちゃん。荷物もあるしねえ」

初江が言った。

「あ、そうか。そうだ。それじゃあ、みんなで行こうよ。お父さんの車で。マイカちゃんにも会いたいし！」

真由美そう提案すると、夕刊から目を離れた真二が言った。

「そうだな。私もオサダさんにちゃんとごあいさつをしにうかがわなくてはな。マコト」

「あ、うん」

短く真言が答えると、真由美がはしゃいで言った。

「ねえ、いつ？いつにする？今度の日曜日？わあ、まゆみむら繭良村ツアー楽しみだね！」

「ずいぶん盛り上がってるな。マユミ」  
あきれたように真言が言った。

夕食を終え、入浴をすませた真言は、ベッドに横になった。

フフ…。なんだかホテルにでも泊まっている気分だな。でももうすぐここに帰ってくるんだよな。そしてしやうとく陵徳高校に戻って…。

真言の胸の中を様々な想いが駆け巡っていた。長田たちとの出会い。繭良村での日々。八重垣の家族。陵徳高校の友人たち。賢一、しやういち遼一、そしてみすは瑞穂高校での生活。

帰らなきゃならないんだよな。長田の家にいる理由は何もないんだから…。

二度と帰れないかもしれないとさえ思っていた八重垣の家で、こうして家族と食卓を囲み、何ものも恐れることなくベッドで眠れる夜。それはとてもありがたいことだった。そしてこれからまたここで暮らすことになるのも分かっていた。

何考えてるんだろ。オレ…。

真言はベッドの中で寝返りを打った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4053ba/>

---

玻璃真人新記(はりまびとしんき) 真言(まこと)の... 第二部 深化(しんか)

2012年1月11日01時02分発行